

# 一 大学開放事業の実証的研究(その1)

## ——開放講座への出席率の分析——

山 本 和 人

(金沢大学大学教育  
開放センター助手)

### はじめに

本研究は、金沢大学大学教育開放センター主催の開放講座(昭和51年度から昭和54年度の間に実施されたもの)への参加者(申込者)および各科目講座への出席状況を検討するものである。目的は、(1)地域住民の学習要求と大学教育開放センターが提供する学習機会(開放講座)との間の需給関係をとらえること、(2)講座(科目)への出席率を左右する要因についての見通しをたてること、を通して、金沢大学大学教育センターの役割を考えることである。

ここで用いる主な資料は、金沢大学大学教育センター(以下センターという)設立以来の受講生名簿、各科目講座への毎回の出欠を示す出席簿である。その他、毎年度発行されるセンター概要、開放講座案内用パンフレット、申込書、日程表、受講生カード(証)、講義要項などを参考にした。昭和51年5月にセンターが設置され、毎年度、受講生名簿および出席簿を作成してきている。なお、現存する出席簿は昭和52年度からのもので、昭和51年度の明確な各回出席者数を示すものはない。検討は受講生名簿と各科目の出席簿を中心に行うが、上に示したその他の資料を、不明な点を補うために参考にした。また、考察の際、筆者による観察も加えてある。

## 1 開放講座の概要

昭和51年度から昭和54年度までに実施された開放講座を表1に示す。<sup>(1)</sup>

表1 金沢大学大学教育開放センターの開放講座

(昭和51年～54年度間)

年度	形態	科目名	期間	回数	開講 時間帯	講師数 (ゲスト, 司会者を含む)	定員 (会場) (注1)
昭和51年	年間継続講座	人間と自然	6/5～	12	第1土曜日 13:30～16:30	1	なし (前半センター、後半教育学部)
		現代社会と法	6/26～		第2土曜日 13:30～16:30	1	同上
		仏教思想	6/19～		第3土曜日 13:30～16:30	1	同上
		社会思想	6/12～		第4土曜日 13:30～16:30	1	同上
		現代社会と経済	6/9～		第2水曜日 18:00～20:30	1	同上
		健康学入門	6/10～		第2木曜日 18:00～20:30	1	同上
		社会心理学	6/16～	11	第3水曜日 18:00～20:30	1	同上
		比較思想	6/2～10/20	10	第1・3水曜日 13:30～16:30	1	同上
昭和51年度	短期集中講座	母親のための算数教室	6/22～7/21	10	火・木 9:30～12:00	4	40
		母親のための理科教室	6/18～7/23	11	水・金 9:30～12:00	13	40 (センター、教育学部)
		カウンセリング講習会	10/12～11/12	10	火・金 18:00～20:30	2	40 (図書館)
		公開講座・現代の犯罪	11/17～12/17	10	水・金 18:00～20:30	11	80 (県立社教センター)

		公開講座・高齢化社会の福祉と生き方	3/15~3/29	5	火・木 13:00~16:00	11	80 (県立社教センター)
		少年柔道教室師範講習会	3/19~3/27	7	土・日・際 9:30~12:00 13:00~16:30	4	30 (体育館教育学部)
昭和52年度	年間	現代の法	5/7~3/18	11	第1土曜日 13:30~16:30	1	90
		人間と自然	5/21~3/10	9	第2土曜日 13:30~16:30	1	90
		仏教思想	4/16~3/10	10	第3土曜日 13:30~16:30	1	90
		北陸の自然環境	4/23~3/25	11	第4土曜日 13:30~16:30	6	90
	継続講座	現代社会と企業	4/20~3/15	12	第3水曜日 18:00~21:00	1	90
		現代と病氣	5/12~3/16	10	第2木曜日 18:00~21:00	1	90
		サンسكريット語入門	4/23~3/18	17	第2・4土曜日 1:30~16:30	1	15
	短期集中講座	心の世界をさぐる—現代心理学入門—	4/16~3/18	11	第3土曜日 13:30~16:30	1	15
		日本の政治—分析と展望—	6/17~7/12	8	火・金 18:00~20:30	7	80
		中学生—ゆれ動くその世界—	11/7~11/24	6	月・木 10:00~12:30	11	80
長期講座(前期)	新入学児を理解する	2/28~3/14	5	火・木 9:30~12:30	6	80	
	万葉の植物	4/15~9/2	10	第1・3土曜日 15:10~16:50	1	90 (開放センター、薬学部)	
	判例による現代法入門	4/22~10/14	11	第2・4土曜日 13:20~15:00	1	90	
	海底の科学	4/22~10/14	12	第2・4土曜日 15:10~16:50	11	90	
		西鶴の文学	4/15~10/7	11	第1・3土曜日 13:20~15:00	1	90

50 II 生涯教育施設の開発

年度	形態	科目名	期間	回数	開講時間帯	講師数 (ゲスト、 司会者を含む)	定員 (会場)	
昭和53年度	昭和	入門考古学	4/15～9/16	6	第3土曜日 15:10～16:50	1	90	
		中国語(中級)	4/20～10/12	24	毎週木曜日 18:00～20:00	1	15	
		教育学の基礎	4/19～10/4	12	第1・3水曜日 10:20～12:00	1	90	
	53	長期講座 (後期)	物質の世界	10/21～3/17	9	第1・3土曜日 13:20～15:00	1	90
			生命の科学—がん中心に—	10/21～3/17	10	第1・3土曜日 15:10～16:50	9	90
			近松とその前史	10/28～3/24	10	第2・4土曜日 13:20～15:00	1	90
			企業経営と法—現代企業法入門—	10/28～3/24	10	第2・4土曜日 15:10～16:50	1	90
			宗教とは何か	10/31～2/13	10	毎週火曜日 18:00～20:00	1	90
			短期集中講座	生活とエネルギー	5/11～5/29	6	月・木 13:00～15:00	5
	少年期を考える—危機の年代に対処するため—	3/12～3/29		6	月・木 13:00～16:00	11	80	
	昭和54年度	長期講座 (前期)	精神分析学	4/21～10/13	10	第1・3土曜日 13:20～15:00	1	90
			ギリシャの哲学—学問精神の発見—	4/21～9/29	11	第1・3土曜日 15:10～16:50	1	90
外国文学への招待—独・英・仏文学—			4/28～10/13	12	第2・4土曜日 13:20～15:00	8	90	
人類と環境放射能			4/28～10/6	12	第2・4土曜日 15:10～16:50	10	90	
くすりの科学			4/21～9/22	6	第3土曜日 13:30～16:30	6	90 (薬学部教室)	
園芸講座—草花と野菜—			4/9～3/2	12	第1日曜日 13:30～16:00	2	30 (教育学部付属農場)	

年 度	長期講座 (後期)	「発達」の心理学—NHK・大学講座に拠る—	10/20~3/5	9	第1・3土曜日 13:20~15:00	8	90
		化学と生活	10/20~3/15	9	第1・3土曜日 15:10~16:50	7	90
		悲劇としての英米文学—シェイクスピア, ハーディ, フォークナーの場合—	11/10~3/22	11	第2・4土曜日 13:20~15:00	3	90
		鉄と鋼—その物性と文化史—	10/27~3/22	11	第2・4土曜日 15:10~16:50	1	90
	短中期講座 集座	現代母親学	3/5~3/19	7	月・水・金 13:00~16:00	9	70

(注1) ( )内に会場が記されているもの以外はすべて大学教育開放センターで行われたものである。

なお、上記の表中、講義日の変更等による一部曜日の修正を必要とするところもあるが(開講時間帯の欄)、煩雑になるので、「原則」としての開講日の曜日(日程)を示してある。

また、期間、回数で記入のないところは「不明」である。

表に見られる「形態」とは、講座(科目)の開講期間のちがいを示すものである。「年間継続講座」とは各年度の初めに始まり、ほぼ1か月に1回講義があり、各年度の末に修了するものである。「短期集中講座」とは、1週間に2~3回の講義を行い、ほぼ1か月で修了するものである。また、「長期講座(前期・後期)」というものは、年度を4月~10月(前期)、10月~3月(後期)の2期に分け、1か月に2回講義が行われ、それぞれの期間に開講し修了するものである。昭和53年度から「年間継続講座」が「長期講座(前期・後期)」へとかわった。

各科目の講義回数は、科目によっても異なるが、「年間継続講座」、「長期講座」の場合はおよそ10~12回、中で語学関係の科目はその倍近い回数になっている。また、回数の少ない科目は1回の講義時間が長くなっており、およそ各科目20時間程度の講義時間数となる。「短期集中講座」の講義回数は5~11回とはばがあり、1回の講義時間についても柔軟性をもっている。

開講時間帯については、昭和51年度、52年度は土曜日の午後の他、週日の夜間にも「年間継続講座」を開講しているが、53年度以後は、「長期講座」

## 52 II 生涯教育施設の開発

は主に土曜日の午後開講されるようになっている。「短期集中講座」の場合は、週日に開かれるものがほとんどであり、時間帯は午前のもつと午後のもつとがある。

講座を担当する講師（ゲスト・司会を含む）数という点では、「年間継続講座」、「長期講座」の場合1人で担当という科目が多く、科目によってチームを組むものもある。次第にチームを組む科目が多くなってきている。「短期集中講座」の場合、すべての科目について複数の講師が担当している。

各科目の定員数は、センターの教室の関係で最大限90名である。<sup>(2)</sup>「年間継続講座」、「長期講座」の場合、少人数が適当と考えられる科目（例えば語学の科目）を除いては、この90名が定員である。（なお、申込みの受け付け、受講許可は90名をこえても行っている）。「短期集中講座」については定員が90名より少なくなっている。

講義の行われる会場は、センターの講義室のほか、各学部の教室、図書館等が利用されている。

なお、表中には示していないが、受講料は昭和51年度から54年度の間、次のようになっていた。「年間継続講座」は4,000円、「長期講座（前期・後期）」、「短期集中講座」では各科目ごとに、講義時間が合計15～24時間の場合1,000円、同じく25～34時間の場合1,500円、35～44時間の場合2,000円であった。

## 2 開放講座への申込率

### （一）科目の分類

1で示したような科目が昭和51年度から54年度にかけて行われてきた開放講座である。まず、これらの講座がどのような分野のものであるか、科目を分類すると表2のようになる（表3も参照のこと）。センターではまだカリキュラムが整備されていないため、ここでは便宜的に、各年度に開講された科目を人文科学、社会科学、自然科学、その他、に分けた。講義のテーマ、講義

要項等から何が中心に扱われているのかを判断した結果である。これまでの科目からすると、分野別の科目数は55ページのようになる。

表2 金沢大学大学教育開放センターの開放講座科目の分類

(昭和51年～52年度間)

分野	年度	科目名	A 定員 (人)	B 申込者数 (人)	B / A	受講生構成比 (%)			
						性別比		居住地別比	
						男	女	市内 在住者	市外 在住者
人	51	仏教思想	—	108	—	41.7	58.3	76.9	23.1
		社会思想	—	98	—	35.7	64.3	80.6	19.4
		比較思想	—	32	—	43.7	56.3	87.6	12.4
	52	仏教思想	90	109	121.1	53.2	46.8	77.1	22.9
		サンスクリット語入門	15	23	153.3	52.2	47.8	60.9	39.1
	文科	53	西鶴の文学	90	102	113.3	26.5	73.5	83.3
入門考古学			90	75	83.3	46.7	53.3	68.0	32.0
中国語(中級)			15	11	73.3	72.7	27.3	72.7	27.3
近松とその前史			90	66	73.3	25.8	74.2	86.4	13.6
宗教とは何か			90	40	44.4	42.5	57.5	85.0	15.0
学	54	ギリシャの哲学—学問精神の発見—	90	77	85.6	39.0	61.0	72.7	27.3
		外国文学への招待—独・英・仏文学—	90	95	105.6	18.9	81.1	86.3	13.7
		悲劇としての英米文学—シェイクスピア, ハーディ, フォークナーの場合—	90	65	72.2	29.2	70.8	83.1	16.9
社会	51	現代社会と法	—	86	—	38.4	61.6	79.1	20.9
		現代社会と経済	—	55	—	60.0	40.0	76.4	23.6
		社会心理学	—	74	—	45.9	54.1	75.7	24.3
		カウンセリング講習会	40	52	130.0	50.0	50.0	78.8	21.2
		公開講座・現代の犯罪	80	35	43.8	80.0	20.0	91.4	8.6
		公開講座・高齢化社会の福祉と生き方	80	74	92.5	60.8	39.2	79.7	20.3
	52	現代の法	90	98	108.9	54.1	45.9	80.6	19.4
		現代社会と企業	90	50	55.6	82.0	18.0	76.0	24.0
		心の世界をさぐる—現代心理学入門—	15	26	173.3	30.8	69.2	65.4	34.6
		日本の政治—分析と展望—	80	14	17.5	78.6	21.4	57.1	42.9

54 II 生涯教育施設の開発

分野	年度	科目名	A・定員 (人)	B・申込者数 (人)	B/A	受講生構成比 (%)				
						性別比		居住地別比		
						男	女	市内 市外 在住者	市内 市外 在住者	
学		中学生—ゆれ動くその世界—	80	80	100.0	5.0	95.0	87.5	12.5	
		新入学児を理解する	80	45	56.3	0	100.0	84.4	15.6	
	53	判例による現代法入門	90	98	108.9	66.3	33.7	75.5	24.5	
		教育学の基礎	90	49	54.4	20.4	79.6	81.6	18.4	
		企業経営と法—現代企業法入門—	90	47	52.2	72.3	27.7	70.2	29.8	
		少年期を考える—危機の年代に対処するために—	80	85	106.3	20.0	80.0	75.3	24.7	
	54	精神分析学	90	127	141.1	31.5	68.5	77.2	22.8	
		「発達」の心理学—NHK・大学講座に拠る—	90	78	86.7	33.3	66.7	74.4	25.6	
		現代母親学	70	88	125.7	1.1	98.9	93.2	6.8	
	自然科学	51	人間と自然	—	118	—	39.8	60.2	76.3	23.7
			健康学入門	—	43	—	46.5	53.5	81.4	18.6
			母親のための算数教室	40	41	102.5	—	—	—	—
母親のための理科教室			40	30	75.0	—	—	—	—	
52		人間と自然	90	91	101.1	49.5	50.5	73.6	26.4	
		北陸の自然環境	90	63	70.0	57.1	42.9	82.5	17.5	
		現代と病気	90	44	48.9	65.9	34.1	77.3	22.7	
53		万葉の植物	90	89	98.9	31.5	68.5	85.4	14.6	
		海底の科学	90	54	60.0	64.8	35.2	74.1	25.9	
		物質の世界	90	37	41.1	54.1	45.9	70.3	29.7	
		生命の科学—がん中心に—	90	35	38.9	40.0	60.0	71.4	28.6	
		生活とエネルギー	60	15	26.7	26.7	73.3	93.3	6.7	
54	人類と環境放射能	90	45	50.0	55.6	44.4	82.2	17.8		
	くすりの科学	90	71	78.9	47.9	52.1	77.5	22.5		
	化学と生活	90	44	48.9	45.5	54.5	75.0	25.0		
	鉄と鋼—その物性と文化史—	90	22	24.4	72.7	27.3	77.3	22.7		
その他	51	少年柔道教室師範講習会	30	24	80.0	—	—	—	—	
	54	園芸講座—草花と野菜—	30	35	116.7	60.0	40.0	71.4	28.6	

人文科学分野

年間継続・長期講座 13

短期集中講座 0

社会科学分野

年間継続・長期講座 11

短期集中講座 8

自然科学分野

年間継続・長期講座 13

短期集中講座 3

その他

年間継続・長期講座 1

短期集中講座 1

「年間継続講座」、「長期講座」の科目では、実施数にそれほど差はないが、社会科学分野の科目数がやや少ない。「短期集中講座」の科目数では、社会科学分野のものが最も多く、次いで自然科学分野のものとなる。たが人文科学分野の「短期集中講座」の開講科目数が0であり、かなりばらつきがあるといえる。

(二) 各科目の申込率と受講生

開講科目を分類すると以上のような特徴がある。次に、各科目の申込率に見られる特徴について検討する。

表2の  $B/A$  が申込率である。各科目の定員数(A)と申込者数(受講生数)(B)とから求めたものである。この値が、ここで検討する需要—供給関係を示すものである。この数値が、センターの提供する学習機会(開放講座)=供給、と、地域住民の学習要求=需要との対応関係を示すと考えた。

まず、先の科目分類に従って、人文・社会・自然科学分野のそれぞれについて、申込率の高さから、どの程度需給関係に対応が見られるかを見ると次のような結果となる(表3)。「短期集中講座」については開講科目数に分野

表3 開放講座の分野別需給関係

分野	形態	申込率			
		100%以上	50%以上 100%未満	50%未満	不明
人文科学	年・長	4	5	1	3
	短	—	—	—	—
社会科学	年・長	4	4	—	3
	短	4	2	2	—
自然科学	年・長	1	5	5	2
	短	1	1	1	—

表5 受講生の居住地別比で見た科目数

分野	形態	分類 科目数	市外在住者が 20%以上の科目	市外在住者が 20%未満の科目	不明
			人文科学	年・長	
	短	—	—	—	
社会科学	年・長	9	2	—	
	短	4	4	—	
自然科学	年・長	9	4	—	
	短	0	1	2	

表4 受講生の男女差10%以上の科目数

分野	形態	分類 科目数	男の 多い 科目	女の 多い 科目	同率の 科目 (差が 10% 未満)	不明
			人文科学	年・長	1	
	短	—	—	—	—	
社会科学	年・長	4	5	2	—	
	短	3	4	1	—	
自然科学	年・長	5	3	5	—	
	短	—	1	—	2	

による片よりがあるので、「年間継続・長期」講座について見る。人文科学分野の科目についてはまあまあの対応を示している。社会科学分野の科目もかなり高い対応をもっているといえるであろう。だが、自然科学分野の科目については、申込率の点からするとそれほど需給の対応関係はよくない。

人文科学分野で申込率が50パーセントを下まわるのは、「宗教とは何か」(53年度年間継続講座)の科目であるが、低い申込率(需給対応の程度)である理由として、51年度、52年度と「仏教思想」という科目が続けて開講されたこ

とがあげられるであろう。自然科学分野の科目は全体的に申込率が低い。「くすりの科学」(54年度長期講座前期)などは受講生の中には薬剤師も含まれるなどして、かなり専門的でありながら申込率の高い科目もあるが、自然科学関係の科目は一般的な関心だけの地域住民(受講生)には難しいと思われるのかもしれない。

また、科目の分野を考えずに申込率の高さだけから見た場合、全体として、「年間継続講座」、「長期講座」の方が「短期集中講座」のそれよりも高いといえそうである。

では次に、各科目の受講生の性別構成比から、講座の特徴を検討する。表2をもとに、受講生の性別構成比で男女差が10パーセント以上あるかどうかで科目を分けると、表4のようになる。社会科学分野の科目は、申込者の男女差の片よりはなないといえよう。しかし、人文科学の分野の科目では、申込者に女性の方が多く、自然科学の分野の科目では男性の申込者が多いといえる。

続いて、受講生(申込者)の居住地別比から科目を分けて検討する。センターの所在する金沢市内在住者とそれ以外の者と大きく分け、表2をもとに作成したものが表5である。市外在住者の中には石川県内にとどまらず、富山県、福井県からの受講生もいる。市外居住地を細かく分けると煩雑になるので、ここでは一括して「市外在住」の者とした。表5に見られるように、市外在住者を含む比率が20パーセントで区切ったのは便宜的な理由でしかない。しかし、5人に1人は市外からの受講生であるということは、その科目がどの程度地域的な広がりをもった需要を持つものであるかを示すものであろうと考えた。特徴としては、社会科学、自然科学分野の科目は、市外在住者を20パーセント以上含む場合が多く、人文科学の科目はほとんど市内在住者が受講するものと、市外在住者が20パーセント以上含まれる受講生が受講する科目とがある。

### 3 開放講座への出席率

#### (一) 各科目(講座)への出席率

次に講座への出席率を検討する。各科目について、「第1回め(開講日)の出席率」、「最終回(講座修了日)の出席率」、「平均出席率」を、申込者数を100(%)としたときの数値で示したのが表6である。<sup>(3)</sup>大きな特徴としては、「年間継続講座」、「長期講座」の平均出席率よりも、「短期集中講座」の平均出席率の方がやや高いということである。「短期集中講座」の方が出席しやすい形態と推定されるが、資料として十分な数の講座数がないので断定はできない。科目の内容、開催時期、開講時間帯も関係すると思われる。

表6 講座への出席率

分野	年度	形態	科目名	第1回出席率(%)	最終回出席率(%)	平均出席率(%)	全回出席者比率(%) ( )は実数
人	51	年	仏教思想	—	—	—	— (8)
		〃	社会思想	—	—	—	— (—)
		〃	比較思想	—	—	—	— (5)
文	52	年	仏教思想	60.6	30.3	42.7	5.5 (6)
		〃	サンスクリット語入門	69.6	34.8	45.0	21.7 (5)
科 学	53	前	西鶴の文学	60.8	49.0	55.6	11.8 (12)
		〃	入門考古学	56.0	37.3	47.3	14.7 (11)
		〃	中国語(中級)	81.8	63.6	63.6	27.3 (3)
		後	近松とその前史	77.3	37.9	54.0	19.7 (13)
		〃	宗教とは何か	70.0	45.0	53.3	10.0 (4)

54	前	ギリシャの哲学—学問精神の発見—	79.2	46.8	57.0	19.5 (15)	
	後	外国文学への招待—独・英・仏文学—	83.2	35.8	53.9	9.5 (9)	
	後	悲劇としての英米文学—シェイクスピア, ハーディ, フォークナーの場合—	69.2	46.2	53.6	13.8 (9)	
社	51	年	現代社会と法	—	—	—	10.5 (9)
		年	現代社会と経済	—	—	—	3.6 (2)
		年	社会心理学	—	—	—	4.1 (3)
	短	カウンセリング講習会	—	—	—	— (—)	
	短	公開講座・現代の犯罪	—	—	—	— (—)	
	短	公開講座・高齢化社会の福祉と生き方	—	—	—	— (—)	
会	52	年	現代の法	66.3	27.6	39.2	12.2 (12)
		年	現代社会と企業	56.0	22.0	33.5	10.0 (5)
		年	心の世界をさぐる—現代心理学入門—	84.6	42.3	55.6	11.5 (3)
		短	日本の政治—分析と展望—	71.4	50.0	52.7	21.4 (3)
		短	中学生—ゆれ動くその世界—	78.8	77.5	79.4	45.0 (36)
		短	新入学児を理解する	93.3	86.7	90.2	75.6 (34)
学	53	前	判例による現代法入門	75.5	41.8	52.0	10.2 (10)
		後	教育学の基礎	79.6	26.5	38.4	6.1 (3)
		後	企業経営と法—現代企業法入門—	72.3	40.4	54.5	14.9 (7)
		短	少年期を考える—危機の年代に対処するために—	87.1	58.8	72.6	37.6 (32)
54	前	精神分析学	81.1	42.5	58.9	17.3 (22)	
	後	「発達」の心理学—NHK・大学講座に拠る—	67.9	25.6	48.1	14.1 (11)	
	短	現代母親学	80.7	59.1	70.5	26.1 (23)	
51	年	年	人間と自然	—	—	—	1.7 (2)
		年	健康学入門	—	—	—	4.7 (2)
	短	短	母親のための算数教室	—	—	—	— (—)
		短	母親のための理科教室	—	—	—	— (—)

分野	年度	形態	科目名	第1回出席率 (%)	最終回出席率 (%)	平均出席率 (%)	全回出席者比率 (%) ( )は実数	
自然科学	52	年	人間と自然	50.5	22.0	34.1	8.8 (8)	
		"	北陸の自然環境	69.8	30.2	37.9	11.1 (7)	
		"	現代と病氣	45.5	20.5	29.8	6.8 (3)	
	53	前	万葉の植物	62.9	37.1	43.5	4.5 (4)	
		"	海底の科学	79.6	37.0	47.4	9.3 (5)	
		後	物質の世界	70.3	48.6	61.3	27.0 (10)	
		"	生命の科学—がん中心に—	68.6	54.3	60.6	25.7 (9)	
		短	生活とエネルギー	93.3	66.7	73.3	40.0 (6)	
	54	前	人類と環境放射能	73.3	22.2	51.1	2.2 (1)	
		"	くすりの科学	71.8	46.5	53.1	11.3 (8)	
		後	化学と生活	63.6	40.9	50.7	11.4 (5)	
		"	鉄と鋼—その物性と文化史—	81.8	36.4	56.6	22.7 (5)	
	その他	51	短	少年柔道教室師範講習会	—	—	—	— (—)
		54	年	園芸講座—草花と野菜—	88.6	48.6	61.2	14.3 (5)

※ 各比率の母数は、各科目の申込者数である。

表6で、第1回出席率が比較的低い数字になるのは、開講日以後も申込みを受け付けることがあるということに関係する。しかしながら、申込者数に対して、第1回出席率は(例外的な科目はあるにせよ)せいぜいのところ最も高くても80パーセント、低い場合でも60パーセント程度である。

## (二) 出席率変化のパターンと関係要因

各科目について各回出席率をグラフ化すると、出席率の変化にいくつかのパターンが見い出された。この節では、そのパターンの検討を通して、出席率の変化にどのような事柄が関係しているかを考えるのが目的である。科目

を「年間継続講座」・「長期講座」と「短期集中講座」に大きく二つに分けた。その次に、申込者数を母数とし、各科目の各回出席者数を比率で表シグラフ化した。分類に際しては、なめらかな曲線あるいは直線になるような推定あるいは平均値を出すという補正は行わず、もとのままの形を生かし、視覚にたよるといふ方法をとった。もとのままの形に意味があると考えたからである。<sup>(4)</sup>

(1) 短期集中講座の場合

まず、「短期集中講座」の出席率の変化パターンは図1のように、I～IVの四つが見られる(昭和51年度の講座の出席率を示すデータがないため、科目数が少ない)。Iは比較的安定した出席率を示し、変動が少ない。「新入学児を理解する」(52年)、「中学生——ゆれ動くその世界——」(52年)がこのパターンである。この二つの科目は女性受講生が多く、市内外在住者が多く、また問題点(テーマ)が絞られている科目といえよう。IIは直線的に次第に出席率が下がるもので、「少年期を考える」(53年)のパターンである。IIIは、「日本の政治」(52年)、「生活とエネルギー」(53年)のパターンで、はじめは高い出席率を示すが、後半になって低い出席率で安定するものである。IVは、「現代母親学」(54年)のもので変化の大きいものである。「短期集中講座」の場合、各回一応の区切りをもった内容で、テーマと講師を考えた上で出欠を決定することもできなくはない。「現代母親学」の場合、第4回めは「女性と仕事」というテーマで、センターで何度か講座を担当されている講師の担当

図1 「短期集中講座」の出席率の変化パターン

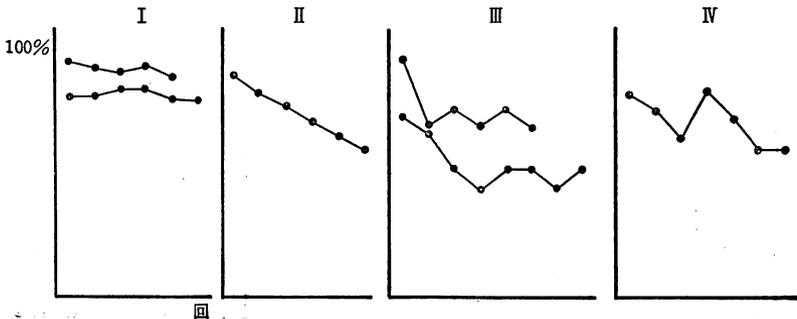
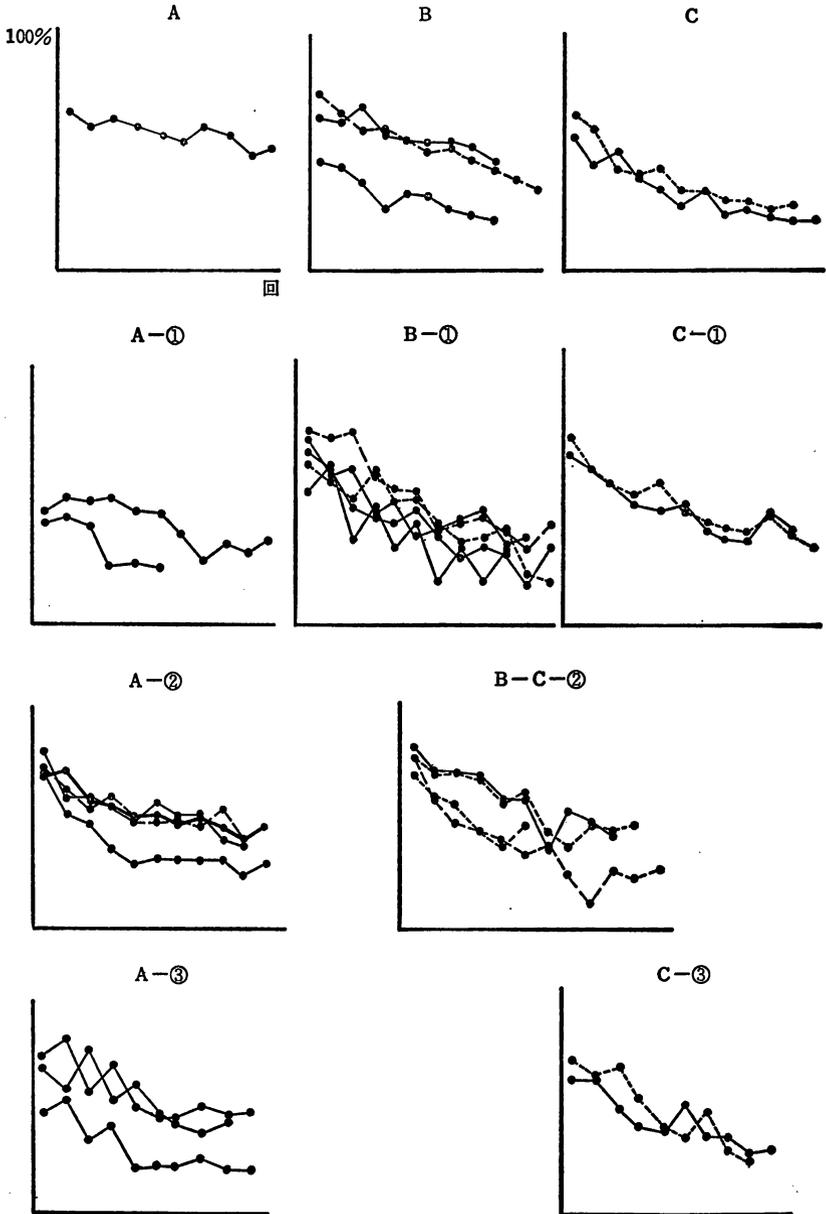
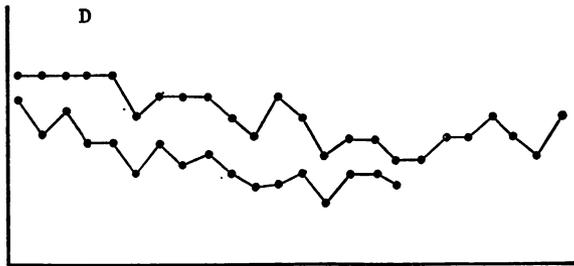


図2 「年間継続講座」および「長期講座」の出席率の変化パターン





日であったことも一因していると思われる。

(2) 年間継続講座・長期講座の場合

年間継続講座および長期講座の各科目について、出席率変化パターンは図2のような結果となった。それぞれのパターンを示した科目は次のとおりである。

A：比較的安定した出席率を示すもの。

「生命の科学」(53, 後)

↑年度 ↑前期・後期・年間の別

A—①：前半比較的高い出席率で安定し、後半低い出席率になって安定するもの。

「入門考古学」(53, 前)

「生命の科学」(53, 後)

A—②：はじめは高いが、すぐ出席率が下がり、低いところで安定するもの。

「北陸の自然環境」(52, 年)

「企業経営と法」(53, 後)

「近松とその前史」(53, 後)

「悲劇としての英米文学」(54, 後)

A—③：前半ばらつきがあるが、後半になって安定するもの。この中には、第1回めより第2回めの方が出席率の高いものと低いものがある。

「現代と病気」(52, 年)

64 II 生涯教育施設の開発

「宗教とは何か」(53, 後)

「化学と生活」(54, 後)

B : 途中で出席率の高い時や低い時があるが直線的に漸減するもの。

「人間と自然」(52, 年)

「物質の世界」(53, 後)

「鉄と鋼」(54, 後)

B—① : ばらつきがはげしいが、全体としては直線的に出席率の下がるもの。

「心の世界をさぐる」(52, 年)

「万葉の植物」(53, 前)

「海底の科学」(53, 前)

「人類と環境放射能」(54, 前)

「園芸講座」(54, 年)

C : 途中で出席率の高くなることもあるが、全体として曲線的に漸減するもの。

「現代社会と法」(52, 年)

「現代社会と企業」(52, 年)

C—① : 前半、後半に1回ずつ出席率の高い時のあるもの。

「判例による現代法入門」(53, 前)

「外国文学への招待」(54, 前)

B—C—② : 直線的または曲線的に出席率が下がり、後半に非常に出席率が低くなる時があるもの。

「教育学の基礎」(53, 前)

「精神分析学」(54, 前)

「ギリシャの哲学」(54, 前)

「くすりの科学」(54, 前)

C—③ : 曲線的に出席率が漸減し、途中で2回出席率の高くなる時があるもの。

「仏教思想」(52, 年)

『『発達』の心理学』(54, 後)

D: 少人数で講義回数が多い場合のパターンで、はじめはある程度安定しているが、次第に少しずつ出席率の低くなっていくもの。

「サンスクリット語入門」(52, 年)

「中国語」(53, 前)

このような出席率変化のパターンを示すことに関わる要因としてはどのようなものがあるだろうか。十分なデータ数とはいえないし、また、今後さらに詳細に検討しなければならないが、いくつかの要因が指摘できる。

1. B—C—②に見られる後半部にある谷(出席率の極端な低下)の現象は8月の講義日に見られるものである。

2. C—①, C—③に見られる山(出席率が一時点だけ上がる)の現象は、9月の講義日あるいは受講生に関心の深いと思われるテーマの講義日に現れるようである。

3. BとCのちがいは、自然科学分野の科目と社会科学分野の科目のちがいのようである。

4. A—②は、受講生の性別構成比が片寄っているもので、男性が多いか女性が多いかのどちらかである。

5. B—①に見られるばらつきは、重複して科目を受講している受講生の多い場合、出席しにくい方の科目に見られるものである。

## ま と め

十分な数の講座(科目)を検討できたわけではないし、必ずしも詳細な点にまで検討が加えられたわけではないが、仮説的に結論をまとめると次のようになる。

- (1) センターの開講科目には分野別にやや片寄りがあった。
- (2) 申込率からすると、人文科学分野、社会科学分野の科目は需要——供

## 66 II 生涯教育施設の開発

給の対応率が高い。

- (3) 開講科目の分野がどのようなものかによって、受講生の性別構成比が異なる。人文科学分野の科目は女性の受講生が多く、自然科学分野の科目では男性が多くなっている。
- (4) 自然科学分野、社会科学分野の科目は、やや広い地域の地域住民に対する需要を満たしている。
- (5) 講座(科目)への出席状況には、いくつかのパターンが見られる。
- (6) 講座への出席率にかかわる要因としては、どの分野の科目かということ、受講生の性別構成比、テーマとの関心の一致、講師、時期、内容の難易度、受講生居住地別比、講座の形態、などが予想される。なお、その他の要因の検討、要因の重みの順位等については今後の課題として残されている。

### 注

- (1) 表1の中で空欄のか所は、今回用いた資料からは確定できないもので、不明として扱うことにした。また、正確には昭和53年度に松任市で「松任教室」として「現代心理学」の科目を開講しているが、詳細は不明なので表には掲げていない。
- (2) 昭和51年度は「年間継続講座」の定員を特に定めず、申し込んだ人には8科目のどの科目を受講しても、何科目重複受講してもよいというものであった。また、講義会場は、センター教室改築工事のため、期間の後半は教育学部教室を利用して行われた。
- (3) この表6には各科目の講義日程全回出席者比率・実数を参考までに示した。各科目についての出席回数別人数及び比率についての検討は別の機会に行う。
- (4) 今後、回帰分析等の利用による検討を行う予定であるが、講座科目数がある程度の数にそろうまで待たねばならない。また、今回分類したパターンの修正を必要も出てくると思われる。